



Title	【interview】アートの場、場のアート 川井田祥子 さんに聞く
Author(s)	桑原, 英之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 27-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71173">https://hdl.handle.net/11094/71173</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

かつたですね。コモンズというイベント全体を作り上げる上で、お二人の存在感が大きく影響していました。私個人の感想ですが、これまでにコモンズでお招きしたアーティストとは、また違ったタイプのアーティストでしたし、「参加者」と「アーティスト」というライン、あるいはその結びつきを特に強く作り出せたのではないかと思っています。ただ存在感が大きかつただけに「他」と「他」の関係、つまりコモンズに参加して下さった方同士の直接の交流は少し離しかつたのかなどという印象も持っています。参加者同士の関係にも、意識的か無意識的かは分かりませんが、どこか、アーティストを経由してつながっていたような、そんな感じがするのです。例

[interview]  
アートの場、場のアート  
川井田祥子さんに聞く

聞き手：桑原英之

i まず今年のコモンズの感想をお聞きしたいのです。

えは今回、臨床哲学の哲学カフェには岩下さんも参加されていましたが、これまでの哲学カフェと少し雰囲気が違つて……

i 確かに少し違つてました。参加者の多くは岩下さんに向かって話していました。特に前半は。

川井田（以下k）  
なんと言つても

今回は、一人の

アーティスト（岩下徹（注一）さん、北山善夫さん／美術家の力が大き

k 参加者としてアーティストの話を聞きたいという気持ちはわかりますけどね。アーティストに直接自分の意見をぶつける機会なんて、なかなかありませんから。ただそうすると必然的に、アーティストとの一問一答的対話へとスライドしていくですね。コモンズフェスタというイベントでは、来られた方の主体的参加ということを意識していますし、ですから「観客」ではなく「参加者」とお呼びしているのですが、今回のコモンズがその理念に沿っていたのかどうか、まだ十分に整理できていないのも確かなんです。

ただそれは最初の企画段階で考えておくべきことだつたのかもしれません。それでも「アートコモンズ」として、アーティストを介してのコミュニケーション回路を一応つくりだせたかなと思います。

あとこれは個人的希望なのですが、アーティストがコモンズの期間中に会場をあちこちウロ

ウロできたらよかったです。例えは去年お招きした美術家の井上廣子さんは、期間中に何度かいらっしゃって、作品を見に来られた方と話しされることもありました。ただこればかりは現実問題として、お二人とも大変お忙しい方ですし、時間的に無理だったとは思っていますが。それでも事前に打ち合わせをして実現できたらよかったです。これは来年への抱負も込めてですね。

### Métier of the Clinical Philosophy

i 今年は「アートコモンズ」というタイトル通り、アートを全面に出しました。これまでもアートとの関係性は強かったと思いますが、今年は特にアートとして見せるということに力を置いていたのでしょうか。

k これも正直に言いますと、アーティストの人選がまずありました。これまで広報面でけつこう苦労してきたからなんですが、お二人の名前を前面に打ち出すことで壁を越えようと考えたことも確かです。もちろんそれが全てじゃありませんが。

i コモンズの企画の進め方も例年とは違つていたように感じます。

去年お招きした美術家の井上廣子さんは、期間中に何度もいらしゃって、作品を見に来られた方と話しされることもありました。ただこればかりは現実問題として、お二人とも大変お忙しい方ですし、時間的に無理だったとは思っていますが。それでも事前に打ち合わせをして実現できたらよかったです。これは来年への抱負も込めてですね。

k そうですね。これまでコモンズの大きな狙いの一つとして、参加団体同士の交流ということがあります。そのため、各参加団体のメンバーに実行委員になつてもらって、コモンズ開催までに実行委員会を開き、交流を深めようと

してきました。それはわれわれ經典院サイドの希望でもあつたわけで、これまで実際に活動内容や方向性が全く違う団体が出会える場としてはうまく機能してきたのではないかと思います。本当はそこからさらに進んで、団体同士のコラボレートによる企画が生まれればいいな、と。でも去年あたりから、「そもそもそういうことを各団体の人達が望んでいるのか?」と考え直すようになつて。普段は別のお仕事をされながら活動している方が多いですし、自分たちの企

k ここからここまでというふうに明確には決まつていません。ただ今年に関してはやはり岩下さんとの連絡役ですね。「岩下さん付き」とすればいいかということと試行錯誤したのが、今年のコモンズです。例えば哲学カフェの場合、岩下さんのダンスWSと運動した形でお頼いした理由の一つに、そういうこともあります。団体同士が難しいなら、事務局が間に入つてつなげてみる。また「アートコモンズ」ですから、アーティスト同士のつながりということも重視する。今回、後者は特にうまくいったのではないかと

思っています（注二）。

i アートコモンズという企画は最初に誰が考えたのですか？

k 秋田です（注三）。毎年年末に反省会をして、来年どんなことをしたいのか考え始め、春頃にはスタッフが全員集まって会議をするのですが、今年の会議の際、ふとこれが閃いたそうですね。それで口もといし、これでいこうと（笑）。

i その今年のコモンズの中川井田さんの役割はなんだつたのでしょうか。

k ここからここまでというふうに明確には決まつていません。ただ今年に関してはやはり岩下さんとの連絡役ですね。「岩下さん付き」と言つていいぐらい（笑）。逆に言うとそこにエネルギーを注ぐ分、他のスタッフの仕事に対してあえて少し距離をおいていた面もあります。それぞれがそれぞれの責任で仕事をこなせるようになります。例えば北山さんの美術の展覧は大塚が担当し、大学の公開ゼミは池野、ドラマカフェ（注四）は柳沢、そしてその人の責任で企画を具体化していく、といった具合にです。それは

それでよかったです。各担当の仕事内容の共有やスタッフ同士の連携に関しては反省点もあった気が……。

i それはうちの研究室でも同じですよ。（笑）。

i 川井田さんが担当された岩下さんは、事前に何度も打ち合わせをされたのでしょうか。

k 岩下さんにお願いすることになった最初のきっかけは、志賀さん（注五）とお会いしたことなんですね。二〇〇二年秋に行われたNPO法人 DANCE BOXの発足記念パーティーで直接お話しする機会があり、その時、いつか應典院で岩下さんの公演をしたいですねという話しが既にしていました。その後、アイディアを温めながら、それだったら次のコモンズでやれたらいなと思って、他の應典院スタッフにはかり了承を得ました。そして志賀さんとスケジュール調整をはじめ、やることは決まつたのですが、岩下さんは直前まで山海塾の海外公演があり日本にほとんどいらっしゃらな

たら今度は志賀さんがコモンズ当日には来れないことが分かったんです。志賀さんが関わってらっしゃる別の企画と日程が重なってしまったので…。

i 確かに当日、志賀さんがいらっしゃらなかつたので、なんでだろうと思つてました…。

k 実はダンス公演を主催するのはほとんど初めてでしたから、その意味でも少し慌てました。いや本当に「ええーーー？」って感じでしたね。二年前のコモンズでも清水啓司さんの「ダンス参観日」という企画はやつたことがありましたが、プロデュースした方に当日の進行をお願いでき

たんです。今回は細かなこと一つひとつを岩下さんにお聞きしながら進めていた状況で…いやらしいなとも多々あつたと思いますが、岩下さんはすべてを受け入れて下さいました。どん

k 場所が場所だけにその場ですぐお返事もできないませんでしたので、とりあえず話を持ち帰りました。秋田は向こうに捉えてくれたんですが、やっぱり大運寺の住職ですから、

i 應典院の中だけでなく、墓地で踊るというパフォーマンスがありましたしね。このアイディア（注六）は應典院サイトから提案したのでありました六月末ぐらいですかね。お二人は互いに面識がありませんでしたし、志賀さんや展覧会をプロデュースした樋口さんも交えてとりあえず一度会つて話しをしようということになりました。そして京都でお会いし、應典院についても写真や資料をお見せしながら説明していたのですが、その中の應典院に隣接する墓地の写真を岩下さんが見て、ここで踊つてみたいと言つしやられた。それが最初のきっかけですね。

i でもよく決断したというか、許可がおりましたね。お墓の所有者を含め理解を得るのは大変ではなかつたですか？

さんはすべてを受け入れて下さいました。どん

守つてもらいたいことも当然ある。だからそれを守つていただけるならばという条件で、OKが出ました。榎本さんはお彼岸の集いなどの際に、秋田から事前に説明し、理解と協力を求めました。岩下さんにも守つてほしいこと、例えばここだけは映れないで、というようなことをお願いして実現できました。

て、そしてその評判が徐々に地元地域にも  
わっていくというか。「ああ、自分たちの地域  
こんな場所があったんだ」という具合に、第  
者や口コミを通じて改めて再発見するとい  
ういう方法ですね。その意味では今は外の  
で漫遊しつつあるのかもしれない。だから、徐  
く少しずつ、ですね。

i シアトリカル應典院(注七)としての活動もう企画で、應典院でやりたいという希望があり、それならばということで、コモンズでその企画をやつた。それがアートと深く関わりができる最初です。

それでも普通のお寺ではできないですよね。最初に思ったのは、應典院という場所の意味や、秋田さんがコモンズなどを通してやろうとしている事が少しずつ地域に浸透してきたからこそできたんじゃないかなと思うのですが。

K どうなんでしょう。ただ、地域密着と言えるほどに應典院の活動が地域社会に受けこんでいるかというと、必ずしもまだ十分ではないかもしませんね。あ、スタッフとしてこれは問題発

大学もその点は同じ気がしますね。地域とのつながりといつても、近隣の住民が敷地内を犬の散歩に来る程度ですから。それに関連して「方法としてのアート」についてお聞きしたい。というのは感興院では講演はもちろん、NPOなどのグループ活動のために場所を提供することもあります。その中でもとりわけ感興院はアートに力を入れているように見えますがなぜでしょうか。

k それは應典院が再建された一九九七年からですね。秋田とも古い付き合いのある應典院寺町俱楽部運営委員の西島さんという方がいて、その方ともこの場所をどう活かしていくかをいろいろ考えたそうです。その相談の結果、ここが劇場であるということを打ち出して、いく方向性が決まつた。

されませんね。あ、スタッフとしてこれは問題発言かな（笑）。でも地域に根付くとき、二通り考え方があると思うんですね。一つは内側から直

k アートへの注目は、きっと秋田の頭の中にはずつと前からあったのでしょうか、実際にア

では演劇への関わりはすごく早かったんですね。

接に地域とつながっていくやり方。もう一つは外側から埋めていくやり方。そして今のところ、私たちは後者の方法で進めていると個人的には捉えています。つまり應典院という場所の存在や活動の意味が、地域より先にまずどこか別の場所や人によって認識されたり評価されたりし

クションを起こし始めたのは比較的最近なんですよ。最初のコモンズは、福祉系のワークショップなどが中心でした。たまたま私がスタッフにならった二〇〇〇年ぐらいからですかね。その頃、榎口さんがアーティスト仲間と一緒に「アート・パッキング」というプロジェクトを進めていました。文

k ええ。もちろんそれ以外の可能性もいろいろ考えてはみたようですけど。九七年の四月に再建されて五月にオープニングイベントをやつたときに、どういう人達に使つてもらうのがいいのかということをラインナップしてみた。そ

してその中からどれがいいだろうということいろいろ意見を聞いた結果、一番反応が良かつたのが演劇だったという。

i ただ演劇との関わりは早かつたけど、特にアートということが意識され始めたのはやはり二〇〇〇年のコモンズですか？

k そうですね。実は最初、アートバッキングの企画を聞かされたとき、「アートねえ」という感じだったんですよ（笑）。いや、ほんと、正直そうだった。それまで私自身はアートと縁なくて、あまり知りませんでしたから。秋田がなぜアートに注目するのか、半年ぐらいはよくわからなくて。

i それでもアートに注目していくようになつた。続ける中で、アートを介して関わるといったことに対する意識が変わった？

k 私個人に話しを限定すれば、後から振り返ってみて分かったという気がします。二〇〇〇年のコモンズをやっている最中も、十分にはみえていなかった。そのへんのことは、でも終わつた後でいろいろ考えるようになつたんです。例えば会報紙「サリュ」の座談会でいろんな人の人に関係するテーマだったとしても、一番来て

話しかけていたり、自分で調べたりしても一度自分でアートを捉え直すようになつた。そこで見えてきたのは、アートが狹義の美術に限定されるわけではなくて、「多様な価値観を認め合うツール」になるんだ、ということですね。それが大きい。だからその意味で、いまは、コモンズが現代アートに関わってきたことにはすごい意味があると思っています。というのも、まさに私たちの常識や日常的価値観にゆきぶりをかけてきましたから。

i 同時にだからこそ一番難しい。

k そうですね。簡単に理解されないし、受け入れられにくい。

i それでも川井田さんのなかでは何か確信がある？

k 私はもともとNPOやボランティアの分野に長く関わつてきましたが、そこである限界を感じるようになつたんです。例えば講演などを企画した場合、講演内容に興味のある人しか来るまではあまりアートのことは知りませんでしたが、例えば私の場合、去年のコモンズで井上廣子さんの作品や本人と出会えたというのは本当に大きかつた。その意味で、アートを介してきっかけをもらった一人かもしれません。

k ありがとうございます。確かにコモンズで

ほしい人に来てもらえないというジレンマをずっと感覚していたんですね。そのジレンマについては今も無くなつたわけではないですが、それに対する一つの方法というか道筋として、アートがあるのかなあということに気付くようになりました。アートって何の気なしにやってありますから。

アートを見たり触れたりするものじゃないですか。アートを介して問題意識に目覚めたり、或いはアートを見た他の人と一瞬にして何かを共有していたりすることもあります。その間口の広さで、アートにある一つの問題意識やテーマについて鮮明に問い合わせたり、立場を問うたりする事はないかもしませんが、そのことがかえつて関わりの幅を広げるような、そんな気がしています。

i 確かに人を迎える柔軟性のようなものがアートにはありますね。私もコモンズに関わるまではあまりアートのことは知りませんでした。たが、例えば私の場合、去年のコモンズで井上廣子さんの作品や本人と出会えたというのには本当に大きかつた。その意味で、アートを介してきっかけをもらった一人かもしれません。

やっていることにに関してある種の確信というか手応えがあります。でもそれもまだ主観的レベルでそう感じるという、そういう段階ですね。これは評価の問題にも関わってきますし難しいのですが、全体として、あるいは客観的にみてどう評価するのかという、その全体像を、私自身まだ掴みきれていない面もあります。例えば今年のコモンズでいうと、アーティストトークの時に観客席から発言された年配の女性がいらっしゃいましたよね。たまたま新聞で岩下さんの公演が行われることを前日に知り、翌日午後の墓地でのパフォーマンスを見に来て、統けて夜の部の公演とアーティストトークにも急遽参加されました。そしてとても感動したとか、いろいろ発言して下さった。ああいう一言には教われました、手応えというのもそういうところからですかね、感じるのは。と同時に、そういうことの積み重ねの中でしか見えてこないのではないかという気もしてます。勿論、それだけではまずいのでしょうかが、ただやはり素朴に、例えば公演の後、本堂ホールから出てきた人の顔が満足そなだとか(笑)、そういうこともやはり大切だし、力になる。

i 評価の問題は難しいですね。芸術に限らず、人文系一般に言えることですが、少し話題を変

えます。コモンズではインターン制度を通じて学生がスタッフとして関わっていますよね。彼女たちはコモンズの中はどういう役割で動いているのでしょうか。

k 正直に言えば、インターンを受け入れつても、彼・彼女らに力を注いで育てるほどの余裕はありません。八月から来てもらうのです

i 先ほども「シアトリカル應典院」の事についてもう少しお聞きしたいと思います。演劇もアートですが、その見せ方というか、演劇への関わり方もここは少し変わっています。今年は特に、若手の劇団を育てるための仕組みを積極的に打ち出しています。

g、その時期だと広報の段階になってしまいます。経験を積むには、本当は企画の段階から入れるのが一番いいのだと私は思います。だから毎年なんとかしたいなあとは思いつつも、なかなか手が回らないですね。勿論、学生たちはよくやってくれたと思ってますが。せめてコモンズや日常の仕事を通じて新しい人出会い、何か掴んでもらえればいいかと。半分聞き直つますが(笑)。

Métier of the Clinical Philosophy

h (笑)。でも本当に余裕がないです。そうやつとも私のインタビューに比べたらはるかに。

j すごいしっかりしました(注人)。少なくともこの人へのインタビューを担当してもらつたので、そっちの方で得るものがあつたかもしれません。また今年はコモンズが終わつた後に、参加団体していくのが二〇〇一年の二月か三月のことでした。ただ昨年から、このままではちょっとまずいだろうということで、内容を見直して企画を立て直そうとしてました。そのための話し合いを始めたのですが。せめてコモンズや日常の仕事を通じて新しい人出会い、何か掴んでもらえればいいかと。半分聞き直つますが(笑)。近鉄劇場の閉鎖のニュースが相次いだ時期だったんです。そういう潮流もあって、百人ぐらいの収容人数の應典院という場で何ができるのだろうと、話し合いを重ねて考えた。例えば自分たちが劇團を育てるというのはどうか。でもそれはおこがましいだろう。演劇を普段からよく見てきた方向性が、演劇と社会をつなぐという、その接点としての役割を担つて、こうということ

k (笑)。でも本当に余裕がないです。そうやつてせいぜい機会をつくることくらいしか。だからあとは自力で掴んでくれといふ。

だつたんです。そして 制作者の育成に力をいれようと。

i その場合の制作者というのは?

k 痞義をはつきりさせているわけではありませんが、まずはマネジメントですね。どこに広報をかけて、どこにチケットを買ってもらうかと云う。あと助成金の申請をしたり、スタッフを東京で段取りをつけたり。お金のやりくりを含めて仕事の範囲は広い。でもそれだけではなくて、もっと必要なのはプロデュース能力ですね。さつきも言いましたが、社会と演劇をつなぐ接点をつくりだすこと。それが夢というか、希望ですね。演劇祭をリニューアルした去年は一般公募で劇団を募集しました。旗揚げ五年以内の若手劇団で創作会議に出席できることが条件です。本当は専任の制作者がいる劇団が望ましいのですが、今のところ制作者と代表と作家を兼ねそなえた劇団がほとんどなので、制作担当としてメンバーが会議に出られるることを条件にしています。応募してくれた二六劇団から七劇団を選んで、ほぼ一年間かけて、一ヶ月間に一回のペースで会議を行い、互いに情報交換しながら積み上げていったのが今年の演劇祭です。私たちは作品を見て劇団を選んだわけではないし、作品

一年間通して變化はあつたのでしょうか

最初、七つの劇団の間に横つなぎはあまりなかつたようです。またお互にどういう広報活動をしているのかといふことも知らなかつたみたいで、自分たちで芝居を打つのに藉一杯という感じでした。でも、会議を通じて、例えは助成金の申請先だとか、少しずつお互の情報を共有していくたし、あと企画書の書き方ですね。劇団によつて書き方も違つてましたから、その辺もお互いを参考にしてつづめていました。五月には懇親会の本堂ホールで記者発表をやりました。さつまも話しましたが、劇場閉鎖が相次いでいたこととあって多くのマスコミ関係者が来てくれました。

— その劇団のメンバーが今回のコモンズ期間中に、ロビーでカフェを開いてました。

— その劇団のメンバーが今回のコモンズ期間中に、ロビーでカフェを聞いてました。

二三九

k それは思いますね。まだ充分に手が回らないんですけど、今後もそういう場を多くつくれたらという希望はありますね。さつきの演劇祭でも各劇団に、三回公演があつたらそのうち一回は必ずアフタートークの時間をつくってもらいました。いずれにせよ、何か仕掛けも必要なな

アートについて語る場所はどこにあるんだ  
ろうと、時々思います。だから今回のドラマカ  
フェという、劇団の人がカフェを開き、演劇に  
いて気兼ねなく語る場所を作ろうとしたことの  
意味って、結構大きいとよく思えるのですが。今  
後もこういう場をつくりたいと思ってらっしゃ

のメンバー一同も親しくなつてしまつたし、コモンズにも興味をもつてくれるかななど思つて「カフエやらへん?」と氷室に声をかけたんです。そしたら話題に乗つてくれて。当日は演劇について深く語るとか、そこまではいかなかつたかも知れませんが、普段あまり演劇になじみのない人や年配の方がふらつと立ち寄つて、演劇人と話しをするという場は作れたかなと思いますね。ただこれも思った以上に準備や仕込みが大変で、したから、劇団の人にはえらいこと引き受けちゃつたと思ったかもしれないですね(笑)。

かもしれませんね。時間と場所の問題ももちろんですが、

注

i なぜアートなのかということの理由の一つに、関わりやすさということをおおつしやつてました。そして確かにそれはあるんだけれども、じゃあ関わった後にどういう展開の可能性があるのかということにはまだ難しい面が残っています。

――即興ダンスを中心とする舞踊家。ダンスセラピーの活動も行っている。

る。シアトリカル感興院とはその場合に使われる名  
称。

二 死亡記事を扱った北山さんの作品を二階ロビーの壁一面に張り出し、それらの作品越しに墓地での岩下さんの即興ダンスを見るという企画と、本館ホールに展示された北山さんの大型作品の前の即興ダンスというコラボレーションとがあった。その後、展覧会をプロデュースした横口よう子さんとともに、アーティ

九二〇〇三年は「SPACE×DRAMA」

の壁一面に張り出しそれらの作品越しに墓地での岩下さんの即興ダンスを見るという企画と、本堂ホールに展示された北山さんの大型作品の前の即興ダンス團(満月動物園)が公演を行っている。

**k** 入り口の開わりやすさがある反面、その出

**Métier of the Clinical Philosoph** k 入り口の閑わりやすさがある反面、その出  
口というか、どうその後の展開につなげるかと  
いうアウトプットの問題はまだまだこれからのが  
課題でしょうね。それこそ本当に、作品を展示す  
るのと同じくらいのエネルギーが必要だと思いま  
す。ただ繰り返しになりますが、そこはやはり  
工夫の仕方があるんだと思います。その時はま  
た臨哲さんとも協力して何かやれたらいいです  
ね。

ありがとうございました。精進します(笑)。

京都造形芸術大学舞台藝術研究センター やアイホールなどのプロデューサーを務め、コンテンツボラリーダンスの企画を多数手がけている。

六 應典院に隣接する墓地で行われた岩下さんの即興ダンスのこと。

七七 この後の話しに出てくるように、應典院では演劇祭はもちろん、劇場としてもよく知られた場所であ

かわいだしょうり  
一九〇〇四年三月までは舞浜院ディレクター  
を務めていたが、この四月からは、関連の  
出版会社で編集の仕事に携わっている。